

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00716

研究課題名(和文) 学習者オートノミーを育むICT双方向授業活用による日本語教員養成プログラムの研究

研究課題名(英文) Research on a Japanese language teacher training program using ICT interactive classes to nurture learner autonomy

研究代表者

安原 順子 (Yasuhara, Junko)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：40309430

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ICTを使用し学習者オートノミーを育てることを目標に、eポートフォリオを使用した日本語教員養成の学習プログラムを構築することにある。また、ICTと対面授業を組み合わせたハイブリッド型のプログラムの構築を目指している。「学習者オートノミー」の研究は、近年、アクティブ・ラーニングにつながる言語教育領域としても関心が向けられ、アクティブ・ラーニングは、オンライン授業の一方法として注目されている。

本研究では、神戸女子大学と提携校であるニュージーランドのオークランド工科大学(以下AUTと略)間で、新たな授業内フィードバックについて実践報告を行い、日本語教員養成のプログラムを精査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、新たな授業内フィードバックについて実践報告を行い、日本語教員養成のプログラムを精査した。神戸女子大学と提携校であるニュージーランドのオークランド工科大学(以下AUTと略)間で、AUTonline(AUTが管理するe-learningシステム)と神戸女子大学manabaを使用した双方向授業を実施した。実際に、研究対象となる授業の試行と連携教育を3年間行った。大学3年生を対象に、1年間に2種類の授業を(音声と文法中心)行い、授業を通じた日本語指導者の育成方法とreflective journalを質的に分析した結果から学習の有効性を検証した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to construct a learning program for Japanese language teacher training using an e-portfolio with the goal of using ICT to foster learner autonomy. It also aims to construct a hybrid program that combines ICT and face-to-face teaching. The study of "learner autonomy" has recently attracted attention as an area of language education connected to active learning, and active learning is attracting attention as one method of online teaching.

In this study, we report on the practice of a new in-class feedback between Kobe Women's University and our partner university, Auckland University of Technology in New Zealand (hereafter referred to as AUT), and scrutinize the program for Japanese language teacher training.

研究分野：日本語教育

キーワード：学習者オートノミー 双方向授業 reflective journal eポートフォリオ 授業内フィードバック アクティブ・ラーニング 日本語教員養成 ICT活用

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

外国人への日本語教育分野においても、その他の外国語教育分野と同様に、マルチメディアを使用した教育の実践は進展が著しい。国内では、(社)私立大学情報教育協会の主催で「教育改革・IT戦略会議」が毎年開催され、ポートフォリオ、e-learning、iPad、携帯電話、ブログなどを使用した日本語教育の試みも多数報告されている。国外では、近年、Bali ICJLE 2016 日本語教育国際研究大会、Venezia ICJLE 2018 日本語教育国際研究大会が開催され、国内外の日本語教育において、マルチメディアを使用した日本語教育への関心は高まっている。1960年代のヨーロッパが発祥地であるとされている「学習者オートノミー」の研究は、近年、アクティブ・ラーニングにつながる言語教育領域としても関心が向けられるようになってきた。

### 2. 研究の目的

異文化間コミュニケーションにおいてオンライン上の双方向授業と reflective journal を使用することにおいては、その効果が質的に分析され、有効性は実証されている。しかしながら、それだけでは、十分な知識と指導力を持った日本語教員の養成にはつながらなかった。そこになぜかという「問い」が生じた。そこで、これまでの双方向授業の研究成果を踏まえて、新たに学習者オートノミーを育てる e ポートフォリオを使用した日本語教員養成の学習プログラムを構築し、遠隔授業やアクティブ・ラーニングの一形態としても必要とされる授業モデルを研究対象とすることにした。

### 3. 研究の方法

研究期間：令和2年度(2020年度)から令和4年度(2022年度)の3年間である。

研究計画：神戸女子大学と提携校であるニュージーランドのオークランド工科大学(以下 AUT と略す)間で、AUTonline (AUT が管理する e-learning システム)を使用した双方向授業として、研究対象となる授業の試行と連携教育を3年間行う。3年目を研究完成年度とする。大学3年生を対象に、1年間に2種類の授業を行い、授業を通じた日本語指導者の育成方法と reflective journal を質的に分析した結果から学習の有効性を検証する。reflective journal を e ポートフォリオの一部として活用し、質的に分析する。また、e ポートフォリオの内容をチェックし、必要な助言を与えることで、効果的に日本語教員を育成する方法論を明らかにする。

研究方法：

〈令和2年度(2020年度)〉

- ・国内外における日本語教育機関での ICT を使用した交流形態の調査を実施した。
- ・学生が e ポートフォリオに提出した以下の対象授業の reflective journal、指導案、レポートなどを分析し、自己評価、相互評価、教師による評価を行った。
- ・双方の学生は、以下の授業に参加し、毎週各自が学習を自己評価して、その結果を reflective journal として双方向授業では AUTonline に提出、常時「学習の振り返り」を行った。
- ・神戸女子大学学生は、外国人日本語学習者の使用する日本語から、文法・音声の誤用についてレジュメにまとめて授業で発表し、e ポートフォリオとして神戸女子大学 online manaba (神戸女子大学が管理する e-learning システム) に提出した。

対象となる授業1：

対象者：神戸女子大学…3年生の日本語日本文学演習Ⅱ(日本語教育ゼミ)約10名

AUT…3年生主体の Japanese in the Global World (JGW、AUT 日本語科では最上級レベルの本語クラスで、ヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR・B2 レベル相当)約10名

授業内容：双方向授業…AUTonline を使用し、実施した。

双方向授業のテーマ：「ソトから見た日本人、ウチから見た日本」「海外長期滞在と移住」など。

AUT と神戸女子大学生でグループを作り、グループごとに一つのブログを用意する。

①ブログ使用の授業：文字を使用する双方向授業

AUT 学生は2週間ごとに各テーマについての課題作文をブログに書き込む。

神戸女子大学生は、それに対するコメントをブログに書き込む。

②Zoom 使用の授業：音声を使用する双方向授業

担当教員が Zoom でのインタビューを設定し、ブログのテーマに沿って日本人学生が用意し、ブログ上に書き込んだ質問に答える。毎週、1グループ約15分間の交流を行う。

③合同発表：両大学の学生がグループでテーマを選んで協働し、発表する。

対象となる授業2：日本語模擬実習、日本語チューター

参加予定学生：神戸女子大学生(上記に同じ)

授業内容：日本語指導の実践…e ポートフォリオを通して実習の指導を行い、教育実習案、教材、reflective journal を提出する。本学の特色である古典芸能についての解説も含む。

①日本語模擬実習(海外教育実習を含む)

学内、海外で e ポートフォリオを活用した日本語教育実習を実施する。

②日本語チューター

授業の一環として外国人留学生・研修生対象の1回完結型の日本語指導を毎週行う。指導は、外国人が日本語で「～できる」ことを重視する。また、Plan(企画)、Do(実施)、Check(点検)、Action(改善)というPDCAサイクルを重視し、常に外国人のニーズの変化に対応できるようにした。

日文ゼミⅡ 第 回 reflective journal 学習の振り返り ( 月 日 曜日 締切課題)
名前
1. AUTonline を使用して、私が現在までに学んだことは…
2. AUTonline を使用して、私が現在までによくできたと思うことは…
3. 難しかったこと、うまくいかなかったことは…
4. AUT 学生との交流について
5. ブログへのコメントはうまく書けましたか。
6. AUT の学生にコメントを返しましたか。
7. 音声の質問はうまく作ることができましたか。
8. AUTonline をどのくらい使いましたか。自宅も学校も含めての回数です。
9. 「異文化理解」について、あなたが理解できて良かったと思うことについて書いてください。
10. 何でも自由に感想を書いてください。

図1 reflective journal の例

〈令和3年度(2021年度)〉

前年度実施の反省点を踏まえて、修正したプログラム内容を検討し、研究の対象とした。ICJLE2020 香港・マカオ日本語教育国際研究大会での発表を予定していたが、コロナ禍のため開催なしとなった。

〈令和4年度(2022年度)〉…研究完成年度

3年間の集大成として双方向授業、模擬実習、日本語チューターなどを行った。年度末には、3年間の研究計画遂行の検討と同時に、研究代表者が海外研究協力者とともに研究成果をまとめる。また、研究代表者は研究成果報告書の刊行とともに、国内での成果発表を行った。今後の神戸女子大学 online manaba のより積極的な使用も検討課題とする。

#### 4. 研究成果

学生には、授業の一環として、双方向授業が終了してから担当する AUT 学生の日本語を分析し授業で発表することとしている。これには、以下の大きなメリットがある。

- ①自分で学んでいける学生が育つ
- ②レジュメによる発表をすることにより、レジュメの書き方、レジュメを使用した発表の方法が分かる
- ③さまざまな AUT 学生の日本語能力に関する情報を共有し、一般化できる分析力が育つ
- ④学生へ直接フィードバックができる

ここで、授業でのレジュメ使用の発表を通じたフィードバックの例をあげる。

レジュメ発表は、A4用紙 2枚に次の項目について AUT 担当学生の日本語の誤用を発表する。作成したレジュメは、当日発表前に神戸女子大学 manaba の所定の掲示版にアップする。

##### (1) 学習者の紹介

担当する AUT 学生のプロフィールを紹介する。

##### (2) 書き言葉の分析

AUT オンライン上の交流ブログから、誤用を、抽出し訂正する。

誤用の文章を訂正するに当たり、この AUT 学生には日本語についてどのような特徴が見られるだろうか。誤用の訂正は、日本語母語話者にとっては慣れればそれほど困難ではない。しかし、そ

これから学習者の誤用の特徴を見つけ日本語教育に応用する力は、改めて伸ばすしかなく、教授者としての学習者オートノミーの育成に繋がる。

例えば、AUT 学生とのオンライン上の交流から次のような誤用の例が見られる。

①い形容詞過去形の誤用

- |    |    |
|----|----|
| 誤用 | 訂正 |
|----|----|
- ・すこし悲しかったです。 → すこし悲しかったです。
  - ・回線が悪いでしたが、たのしかったです。 → 回線が悪かったです、たのしかったです。

②「な形容詞」の誤用・・・「な形容詞」を「名詞」と誤用している。

- |    |    |
|----|----|
| 誤用 | 訂正 |
|----|----|
- ・好きのクラス → 好きなクラス
  - ・ひまの時間 → ひまな時間
- 「な形容詞」は、「名詞」を修飾する場合、好きな、ひまな・・・そのまま「名詞」を接続する。  
好きなクラス、ひまな時間  
好き、ひま・・・「名詞」の前に「な」を入れる。  
好きなクラス、ひまな時間

③「だ」の誤用

誤用文(「だ」の脱落)の理由は文法規則の「過剰般化」によるものである。つまり、以下のよう  
に訂正できる。

- |    |    |
|----|----|
| 誤用 | 訂正 |
|----|----|
- ・ラグビーとテニスとします。 → ラグビーとテニスだとします。
  - ・プロの試合とか学校の試合がたくさんあるから、この二つが一番人気あるのスポーツとします。 → プロの試合とか学校の試合がたくさんあるから、この二つが一番人気あるのスポーツだとします。
  - ・〇〇さんもすきとします。 → 〇〇さんもすきだとします。
  - ・できることが多いと思う。 → できることが多いと思う。

「～とします」に接続する形は、品詞により次のように変化する。

「だ」の有無		
動詞	休むとします	×
い形容詞	寒いとします	×
な形容詞	便利だとします	○
名詞	学生だとします	○

表1 「～とします」に接続する形の「だ」の有無

ところが、この AUT 学生は「～とします」の「と」の前がそれぞれ名詞であるにもかかわらず、「だ」を付与していない。発表を通して、すべての誤用は、同じ理由によって起こることが理解できれば、学生の成長が見られる。

さらに、AUT 学生とのオンライン上の交流から次のような誤用の例が見られる。

(3)話し言葉の分析

Zoom を使用した交流から、音声の誤用を、抽出し訂正する。音声での誤用については、予めどのような点に着目するかヒントを与えて分析させた。これらは、学生の母語・家族間での使用言語によって異なるが、概ね次のような項目立てができる。

- ・長短音の発音  
いじょです → いじょうです 以上です
- ・清濁音の発音  
ごくぎ → こくぎ 国技
- ・カタカナ語の発音  
Online → オンライン
- ・アクセント  
へんじ(HLH) → へんじ(LHH) 返事

(4)まとめ

結果の分析と発表者の意見

発表を通して、すべての誤用は、同じ理由によって起こることが理解できれば、学生の教授能

力にも成長が見られると考えられる。

本稿における「学習者オートノミーの構築」のための授業内フィードバックを重視する試みは、オンライン上の双方向授業におけるeポートフォリオや発表を活用し、学生が自律的に学習する学習者オートノミーを育てる授業プログラムの構築に寄与できると考える。本研究の成果により、学習者の学習への意欲の向上とともに、海外の日本語学習機関との新しい学習プログラムの構築が見込まれる。その結果は、双方向授業を使用した学習プログラムの構築へと拡がり、さらに、その成果が「学習者オートノミーの育成」に繋がる。そのためには、教授者には、さらに学習者の能力を伸ばす効果的なフィードバックが必要とされる。

#### <引用文献>

- ① 安原順子、「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム—2020年度の報告と学習者オートノミーを育てる授業内フィードバック—」、『神女大国文』、第32号、2021、56-66
- ② 安原順子、「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム—2021年度の報告と学習者オートノミーを育てる授業内フィードバック(2)」、『神女大国文』、第33号、2022、95-106
- ③ 安原順子、「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム—2022年度の報告と授業内フィードバック(3)」、『神女大国文』、第34号、2023、53-62

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安原順子	4. 巻 33
2. 論文標題 ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム 2021年度の報告と授業内フィードバック(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神女大國文	6. 最初と最後の頁 95-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原順子	4. 巻 16
2. 論文標題 「授業時間の使い方」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教職課程年報	6. 最初と最後の頁 31-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原順子	4. 巻 32
2. 論文標題 ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム 2020年度の報告と学習者オートノミーを育てる授業内フィードバック	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神女大國文	6. 最初と最後の頁 56-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原順子	4. 巻 15
2. 論文標題 「授業中の教師の話し方」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教職課程年報	6. 最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原順子	4. 巻 34
2. 論文標題 ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム 2022年度の報告と授業内フィードバック (3)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神女大國文	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原順子	4. 巻 17
2. 論文標題 「授業における指名の方法」について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教職課程年報	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 安原順子
2. 発表標題 学習者オートノミーを育むICT双方向授業活用と日本語教員養成 学生へのフィードバックを中心に
3. 学会等名 令和3年度 私情協教育イノベーション大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安原順子
2. 発表標題 学習者オートノミーを育むICTを活用した日本語教員養成プログラム
3. 学会等名 令和2年度 私情協教育イノベーション大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安原順子
2. 発表標題 ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラムと授業内フィードバック
3. 学会等名 令和4年度 私情協教育イノベーション大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関